

心に残る東京 2020 オリンピックのシーン

## 女子ソフトボールチームが金メダル

2021-8-5

野口幹夫



女子ソフトボールチームが金メダルを取った。女子サッカーチームは「なでしこジャパン」と呼ばれているが、ソフトボールにはそのようなニックネームもない、オリンピックの種目から外されていたのだ。東京 2020 ではむろん復活した。3大会ぶりである。日本の女子ソフトは強かった。世界ランキングはアメリカに次いで2位だった。

東京 2020 オリンピックでは順当に勝ち上がり、予想通りアメリカとの決勝戦となった。

伝説の名投手上野由岐子がこの日も好投でアメリカを0点で抑えてきて6回を迎えた。日本は2点リードだった。後2回というところまで来たのだ。しかしアメリカも黙っていない、この回はいきなりそのトップバッターがセンター前にヒットを放った。ノーアウトのランナーをはじめて許したのだ。

ここで宇津木監督は投手交代を決意 若い後藤希友がマウンドに上がる、彼女のリリーフはこれまでの試合で、出ては三振の連続を奪う完璧なリリーフを演じていた。

しかしその彼女も、次のバッターにレフト前にヒットうたれた、ノーアウト 1-2 塁となった、絶体絶命のピンチ、私もこれでアメリカにやられるなーと思った。

そして案ずる通り、次のバッターが三遊間にヒット性の強いライナーを打った。サードがグラブに当ててそらした。アーと声をあげた次の瞬間、何が起きたの

か、2塁ランナーが戻ろうとしている、戻れないでアウト。ダブルプレー！

何が起きたのかわからなかった。テレビはその瞬間を繰り返しリプレーしてくれた。それでわかったことは、その見えない一瞬、サードがグラブに当てて、宙に浮いたボールをショートがノーバウンドでとったのだ。つまりライナーを二人がかりでノーバウンドで捕ったのだった。飛び出した2塁ランナーは戻れず2塁でアウト、一挙にゲームがひっくり返る一瞬のファインプレーだった。そして7回は再び上野が登板、これはお祝いのセレモニーだった。最後のバッターのキャッチャーフライで終わった。上野は全員からのお祝いを受けたのだった。

ソフトボールは、スポーツには縁遠い我ら夫婦にとって唯一の共通のスポーツなのだ。妻は中学の時学校のソフトボールクラブに入って鍛えられた。サードの練習中にトンネルをして叱られたなどの経験を持っている。自分は中学・高校でよくソフトで遊んだ。小学校のころ三角ベースの野球をして遊び、中学に上がった時は迷いもなく野球部に入れてもらった。しかし並み居る大男ばかりのなかで華奢な自分についていけず逃げた。

しかし好きだったのでソフトボールはよくやった。高津高校でも遊びの時間にやった、もとよりしっかりしたグラウンドで、きちんとチームを組んで道具を使ってやったのではない、ボールとバットだけで、球は柔らかいので素手でつかんだ。どうできたのか、今は思い出せないが、楽しんだことだけは覚えている。高津5期生の皆様覚えていますか？